

中国貨幣の歴史

20 五代十国の貨幣②—南唐、前蜀、後蜀の貨幣—

「南唐」の貨幣



開元通宝



大唐通宝



(一文錢)



(二当一錢)

唐国通宝

南唐では、「開元通宝」と同じ銭銘・大きさの銅銭のほか、独自の銭銘を持った「大唐通宝」や「唐国通宝」が発行された。「唐国通宝」は、2枚で一文銭1枚に相当する小型の銭も発行され、華南の諸国で流通していた私鑄銭や鉄銭・鉛銭と等価で通用させた。

「前蜀」の貨幣



永平通宝



通正通宝



天漢元宝



光天元宝



乾徳元宝



咸康元宝

前蜀では、年号銭が改元の都度発行され、「永平通宝」など6種類が知られている。

「後蜀」の貨幣



(銅銭)



(鉄銭)

広政通宝

後蜀では、年号銭である「広政通宝」の銅銭が発行され、後に鉄銭も現れた。このほか国号銭の「大蜀通宝」も発行されたが現存は極めて少ない。

五代十国時代、華北の王朝と隣接していた諸国では、五代王朝と同様、「開元通宝」などの銅銭（一文銭）が基本通貨とされ、華北に南接する揚子江流域で大きな勢力を持った「前蜀」、「後蜀」、「南唐」では独自の銅銭（一文銭）も鑄造・発行された。また「南唐」では、華北の銅銭と華南の鉄銭・鉛銭とをつなぐ銭（二当一銭）も鑄造・発行された。

(写真は全て実物×100%)

五代十国の時代(907～960年)、黄河流域の華北は、五王朝が興亡し政治的に不安定で、経済的にも停滞していたが、華中・華南は、10の国家が成立する分裂状態のなか比較的平穩で、穀物、塩、茶などの農業生産力の向上のほか、陶磁器産業の発展、盛んな海外貿易を背景に経済先進地域となっていた。華北王朝と華中・華南の諸国とは、政治的には緊張・対立関係にあったが、南北諸国間では農産品はじめとする交易が盛んに行なわれていた。

華北の王朝と隣接していた諸国の貨幣の状況をみると、華北王朝の北に位置した「北漢」(951～979年、山西省太原<国都：以下同じ>)、また、華中・華南の諸国のうち、揚子江下流域の「呉」(902～937年、江蘇省揚州)、揚子江中流域の「荆南」(907～963年、湖北省江陵)では、独自の錢貨の鑄造はなく、華北の五代王朝と同様、開元通宝などの銅錢(一文錢)が基本通貨とされた。

呉の滅亡後、唐の復興を掲げて成立し、華中から華南にかけて勢力を広げた「南唐」(937～975年、江蘇省南京)では、当初は唐の開元通宝と錢銘・大きさが同じ銅錢を鑄造・発行したが、後に「唐国通宝」や「大唐通宝」といった独自の錢銘の銅錢を鑄造・発行し、これらは現存も多い。このうち唐国通宝は、一文錢のほかに、2枚で開元通宝など一文錢に相当する「錢子」といわれる小型の錢(二当一錢)も鑄造・発行した。これは華南の諸国で広く流通していた質の悪い私鑄錢や鉄錢・鉛錢と等価で通用させることを目的としたもので、華南諸国の鉄錢・鉛錢と華北諸王朝の銅錢とをつなぐ貨幣であったと考えられている。

揚子江の上流域で大きな勢力を持った「前蜀」(907～925年、四川省成都)では、華北の五王朝と同様に銅錢(一文錢)を基本通貨とし、年号を冠した独自の銅錢を鑄造・発行した。改元の都度新たな錢が発行され、「永平元宝」など6種類の銅錢が知られている。前蜀の後に成立した「後蜀」(934～965年、四川省成都)では、国号を記した「大蜀通宝」や年号を記した「広政通宝」といった銅錢(一文錢)を鑄造・発行した。

五代十国時代の末期、華北で「後周」(951～960年)が成立し、隣国の後蜀、南唐への侵攻、領土拡大の動きに出ると、これら隣国での貨幣発行・流通状況は大きく変化した。南唐では、後周の侵攻により有数の塩や茶の産地を奪われ、最大の輸出品を失い輸出超過から輸入超過へ転落すると銅錢が流出し、代わりに鉄錢の鑄造を余儀なくされた。また後蜀では、後周の侵攻に伴う軍事費の増大で財政が悪化すると、銅錢のみの流通を維持することが困難となり、鉄錢の鑄造を開始した。両国はいずれも、鉄錢を銅錢とともに1文として扱い、銅錢4文と鉄錢6文とを合わせて10文として通用させる政策をとるが、民間の取引では受け入れられず、銅錢と鉄錢との取引相場が出現する結果となった。

[山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館]

【参考文献】

宮崎市定、『宮崎市定全集 第9巻 五代宋初の通貨問題』、岩波書店、1992年

宮澤知之、『中国銅錢の世界—錢貨から経済史へ—』、思文閣出版、2007年

山岡直人、「中国貨幣の歴史19五代十国の貨幣①—華北・五代王朝の貨幣—」、『金融研究』第26巻第3号、2007年